

単調な、サイレンの音だけが一日の終りを告げる合図であった。幾重にも折り重なった山懐だけが、二人の逃亡者の安住の地であった。

男と女の生活が始まってから十日ばかりが過ぎていた。仲むつまじい恋人同士、二人は蜜月の日々の中に身をおいていた。

圭吾はただただ、玉江の肉体のみに溺れた。考えてもみなかった強烈な歓びに、もう自分が脱走兵であることも忘れた。あの、眼球振盪症(しんとう)の症状も日増しに快方に向っていた。

一つは、湯治場を思わせる山間の湯泉の効用もあった。それに、もう人を怖れる必要もなかった。

圭吾には玉江が実の姉のよし子のよほにさえ思っていた。やっと圭吾は玉江を歓ばせるために奉仕できる男になった。感謝の気持を表わすには、玉江に肉体の歓びを授けるしかない。

言われる通りに、口唇で玉江の秘部を愛撫した。

求められるままに女の愛液を吸った。

「ちのを食べへて！舌と唇で食べるのや」

いいと言われるまで、彼は玉江の股間に顔を埋めた。女のもらず喘ぎの声に、歓びの強弱を知った。

玉江は登り詰めてくると吐く息よりも、吸う息のほうが強くなる。平らな岩室の寝所で抱き合っている時は、声が岩壁に反響するので、その凄まじい喘ぎ声を聞いているだけで暴発しそじになった。

玉江のためになら何でもできると思った。

女の体の不思議さについて彼はある種の感動さえ感じとっていた。男の側に余裕ができる日々それぞれの反応の仕方に差異があることに気付いた。

玉江は、この二、三日、抱く時の主導権を彼に委ねた。どうしてもおのれの力で、圭吾は玉江を歓ばせなければならぬのだった。

ていねいに、やさしく責めるとそれなりに快さの感じを返す。激しく、なお強く責めると苦痛の表情のなかにも歓びを表わした。

もつと、圭吾の眼を瞳みはらせたのは、女の体の各部がそれぞれに微妙に反応を示しているということだった。いつも、玉江の大袈裟な身のこなしと喘ぎの声に半ば演技めいたものを感じていた圭吾だったが、その考えはまちがっていた。

玉江の反応の示し方の強弱につれて女体は正直に変化を表わした。玉江の白い肉体が朱を帯びてくる。

首筋から心臓の下あたりにその傾向が顕著だった。よくなって行く腹壁が強く絞られた。腰が逃げる。

それからちと強烈なのは結合部が息でもしているように、ぴくぴくし始め、じわーと締まってくることだった。

玉江はだらしなく口を開け、眼を閉じているのに瞼の下の眼球がゆっくりと動き始める。虚ろな表情になり、首を支えている力が失われて果てるのだった。

おかつたわー、ごまいこ抱けるよになつたなあ。ちとちと色んなと教えてあげるよてにな。ほんまはな、女の人、凄いいことよなつたら、氣い失つてしまひやで」

そう言つて玉江は圭吾を賞めてくれた。

またまた圭吾は稚拙な男でしかなかった。

だが、玉江は、あの女の体の扱いに慣れた葉室勝の熟達した技の一つ一つを、この初心ぶな、男に仕込んでやろよと思つていた。

ある夜、玉江は食糧を手に入れるためにまた鉱業所の食堂まで足を伸ばした。

圭吾の分も食料は調達しなければならぬ。

生野の街まで一ノ瀬圭吾がやって来たという話を多分、足取り調査から憲兵隊は割り出しているはずだった。脱走の日、列軍は、雪害のため生野止まりとなっていたのだ。それで玉江は人の出入りする場所に圭吾を行かせることをしなかった。

近頃では大胆になり、直接、調理場に忍び込むことを覚えた。大きな鉄釜のそばに寄り、炊き立ての米飯を持参した袋に取り込んだ。

ちよつとした放れ技で、それだけに危険度も大きかった。その夜、とつと玉江は罫に嵌まった。

「こいつやな！泥棒猫が」

守衛の一人が、。物陰に身を潜めていたのだった。いきなり六尺棒で後頭部を一発やられた。

耳のうしろに当たったので、一瞬、ぐわーんと衝撃が伝わり、何も聞えなくなった。鼓膜を破られていた。

眼がかすみ、前につんのめったが、死力をふり絞ってよろよろと立ち上る。今度は前から、眉間めがけて角棒が振りおろされた。危う身をかわすが、肩口に当たっていた。男が体当りして来た。その勢いで、うしろざまに玉江は倒れた。男と揉み合ふ。

「なんや、おまえ女子やな！」

男がひるんだ隙に体の上の男をはじき飛ばした。

頭の芯がくらくらしたが態勢を立て直し、身を起す。逃げようとしたら男が片足を掴んだ。

離そうとしないので、玉江は思いっ切り男の手を噛んだ。炊事婦の女たちが加勢した。竹箒が顔を目に向けて飛んできた。入口あたりにいた女二人に体当りを喰らわせ、表に飛び出す。しつかりめしの包みだけは手にしていた。近くの竹林に飛び込む。

藁草履の足裏に竹の切口が刺さっていた。

玉江は傷には気付かず。坂道を転げ、闇に紛れてたどいた走った。途中で口惜しきがこみあげて来た。

急に頭の芯がずきずきと痛み出した。

耳のあたりに手を当てたらぬらぬらとした血が手につ

いた。左足裏が痛くなり歩いていられなくなつた。

それでも気丈な玉江はなお走つた。

「こんな惨めな姿は圭吾には見せられない」と思った。

逃げて行く途中で、勤務の交替を知らせるサイレンが低い唸り声をあげた。太盛山新坑の通用門を少し出外れた草叢まで来たら急に眼の前が真つ暗になり、つんのめるように玉江は倒れそのまま気を失つた。

明方近く、寒さのために眼が醒めた。

体中がすつかり冷え、眼ざめたら歯の根が合わず、かちかちと鳴っていた。

はじめに考えたことは、一ノ瀬圭吾のことだった。

澄んだ夜空が眼の上にあつた。

薄明の空だったが凍てた空にまた星明りはあつた。

空がとても近いものに思えた。

ここに圭吾がいてくれたらと思つた。あたたかな体で抱きとつて欲しい。そう考えたら不覚にも泪がこぼれ出た。あれから何時間が経つたのか。

やつと体を起し歩き始める。

まだ、白□坑の棲家までは四里はある。

玉江の足でも小一時間はかかる距離であつた。

また足裏の傷がずきずきと痛み始めていた。それでも玉江は片足引きずりながら歩いた。

白□坑の横穴に辿り着いた頃にはもう朝の気配があたりには忍び寄っていた。薄藍色の空がすでに空の星の輝きを奪っていた。

「さまで行つたのや。も帰つて来んのかと思つた」まんじりともせずに彼は夜を過ぎたにちがいない。

入口のあたりで帰りを待つていたのでろっふ

玉江の姿をみとみると、岩の上から飛びおり迎えるために走り寄つてきた。

その時から、何喰わぬ顔で玉江は足を引きずるを止めた。気付かれたくはなかつた。

途中、玉江は小川の水で傷口を洗つた。後頭部の傷

は髪の毛が隠してくれた。

今夜のことは口にすまいと彼女は心に誓っていた。

自分の失態は知られたくなかった。

近付いてきた圭吾は、その時、いきなり玉江を枯草の上に押し倒した。

カヤの枯野がすつぽりと一人の姿を隠した。

後ろに倒された時、また頭の芯がずきりと痛んだ。

が、玉江は嬉しかった。玉江は圭吾に身を委せた。

こんな迎え方のほうが好きだった。待ち焦がれていた男の真情が嬉しかった。冷えた体を圭吾が暖めてくれた。圭吾はもう玉江の体がなくては生きてはいけない男になっていた。今は乳首を含んでいた。

小さい頃に母を亡くした圭吾は玉江の胸に縋り無心に乳首を吸っている。玉江は一体感だけ欲しかった。

疲れていた。

頭の芯が痛み長い愛撫に耐えられそうになかった。いつもならたつぷりと愛撫をさせてからしか、玉江は挿入を許さなかったのだ。

余程、長い時間待たされたのが辛かったのだろう。圭吾は言われるままに、体をつないできた。

荒々しく、玉江の下半身を剥いた。

もう当初のあの弱々しきはなかった。

2

うちは小さい時からのみなし子やもん。それに、きよだいもおらんかったからえらい淋しい思いをしたわ。夜になるとけんけん狐が鳴いてて、また化かしに来よあたかて父ちゃんがいうもんやから、頭まで布団かぶって寝たもんや。廁かわや(は外にあるもんやからよいかん、そいでよう日本地図かいておこられたわ)」

なあ、もうそろそろ教えて欲しいのや。なんで女一人でこんなところに来たんや」

あのな、うちは男はんが好きな性質たちなんや」

好きて……それは」

あほやな、あんたな、女が男はんが好きになつてしまつたらどないなると思つろ？もう殺してしまいたい、そんな気持ちになることがあるのやわ」

殺すて、そんなとら？」

二人は山深い湯泉にひたりながら、そんな会話を交わしていた。頭の芯はまた時折り痛んだが、肩口の紫色に膨れ上つていた傷跡は、温泉治療の効があつたのか、すっかり跡がなくなつていた。

傷口は圭吾には転んで肩口を打つたと嘘をついた。

あんた、女の人はな、ほんまに相手が好きになると男の人の、食へてしまいたいと思つろがあるのや」

食へるぞ？」

おふ、まあこれは例え話や。もし、あんたが死んでしまつたらなつたら、うちはあんたを誰れにも渡さへん。このうちの住居にな、ずーと死んだかて住ませてあげる。それで、死んでもあんたを大事にしたげるわ」

こんな会話を持ち出したのはまた頭のどこかに葉室勝への思慕が強く残つていたからである。

いや、体への記憶とつたほうがいいのかも知れない。

圭吾の懸命ぶりは認めるとしても、また本当の意味での絶頂感、玉江は手にしていなかった。

それで、圭吾の眼を盗み、何度か、あの氷の室に玉江は寵（もつ）た。密かな情事とでもいふべき行為だつた。

死者と会話を交わし、勝のために股間を開いた。

やさしそで、巧みで、熱情に充ち溢れていた男……本当の女の歡びを授けてくれた勝（かつ）が生きていてくれたら……好きな女に自分を殺させた男は、今も端正な顔を玉江に向けていた。

女はな、男だけではあかんのや。自分でも愉しんでええのやで。女の体のことは男にはよわからんものな。わしに教えてくれ。女がな、自分で愉しむところを見たいのや。わしがそれと同じことしたる』

勝と知り合った時、玉江はその眼の前で、このはずかしい行為をやらされた。

その時と同じことを玉江は死んだ男の前で演じた。壁に背をさせた姿勢の勝は、くろいだ感で坐っている男に見えた。眼は開けたままであった。

玉江は自分の股間がよく見えるようにしてやる。指をひそみに這わせた。肉のかたちをした核の部分に震えの感覚を伝えた。包皮の上からの愛撫は先端部だけに向けられたのではない。

ふつくと盛り上った基底部は三センチほどであった。はじめは指先で小さな円を描く。ぴたつと基底部を覆うように指の腹を縦に密着させる。

少し力を入れると強い圧覚が生じた。いちばん好きなあそびは最後にとっておく。

包皮部分を上に引き、肉粒を露頭させる時の感じが玉江は好きだった。

勝さん、勝さん……」と名を呼ぶ。もう瞼は閉じていた。勝とは一体感を味わった。葉室勝は死んでいたが、玉江は性の記憶の中に情人の男を呼びもどしていた。この、どこかおぞましい性の深淵をのぞき見たところで、一ノ瀬圭吾には到底理解のできぬ話であった。

「……死んでもあんたを大事にしたげるわ」と言われたところで、圭吾には何の現実感もなかった。この玉江の呟きに、怪訝げげんな面持ちしか圭吾が向けて来なかったので、玉江は話題を変えた。

あんたなあ、戦争にいたら今頃死んでるわ。若い兵隊はんはええ思いもせんとお国のために死んで行くんな」

ぼくみたいに逃げ出すよしましや」

あほやな、あんたほんまにそんな下思そんのか？」

そりやそりや。どっせこんな体や。ぼくは死ぬのが恐（おそ）うて逃げたんやない。戦車のな、下になつて死ぬ言われたら立派に死んだる。そやけど、ぼくをいじめた奴の命令やったら絶対と言（い）はきかんで」

もそんな話はええ。忘れえ、こゝは戦争なんかと関係ないわ。こゝにあるのんはな、あれするどだけや。学がのうも貧乏人でもなんでもええのや、男と女でさえあれば、あれするのは自由なんや。うちは戦争に行く男はんの気が知れん」

「そらあ、ぼくかて……」

おあしや、今日は凄いいいよ」

湯泉近くの草叢に、持参した古毛布を敷く。風のない日で暖かった。三月に入ったばかりのある日のことである。湯を浴びた玉江の白い肌は朱に染まっていた。

豊かな乳房と腰太の下半身、二十六歳の女の体はとても美しかった。

「あんたは幸せもんやで、はよおいで」

二人はもられるよほして倒れ込む。

「ほれ、指をかしてみ」

二人は向い合っていた。玉江は立膝をし股間を開いた。圭吾はひそみに指を入れさせられる。

「な、わかるる。ちものは名器なんや。つるしぼぼと言って、上のほうでぎらしてやる。ちものは複雑なんや、ほれえ、わかるか、指先に感じとるやろ」

「そう言つて玉江はその部分を締めた。指先に律動感が伝わった。玉江が力んでみせたのだった。

「なあ、男はんにもぎけるんやで」

「締めるいこそも」

「ちやあ。男はんのはな、大きめなちてな、それで、びびつと来るのや。それが、ちものな、こゝに伝わつて来る。凄いいことええ、気持なのや」

「ちの凄うよおなるんか？」

「そらや、凄いいいな」

玉江の唇の端がちよと引き吊った。

「ええか、最高にしたるちてにな、苦しめこそ、我慢すのやで」

二人の結合部はしつかりつながれていた。

いつかと同じように玉江が上体をかぶせていた。

その時、玉江が考えていたとは、勝とのあの時の凄じを感じてみたといふことだった。

たしかにあの時、勝のそれは力が漲つたが、勝が告げほどの強烈さはなかった。

それが伝わる前に、萎縮し、勝は息絶えていたのだ。

圭吾を仮死の状態にすれば……勝が初めて首を締め、あそびを口にした時の蘇生の術の話を、玉江は思い出した。

首を締めて三分以内なら、人工呼吸したら生き返る、だれかに聞いたことがあるのや……」

玉江はこの蘇生術を圭吾に応用してみようと思っていた。ええか、ええか……ようちて来たらしい」

丸い腰が圭吾のそれをしごきにかかる。玉江は上体を倒し、両手を圭吾の首に掛けていた。

両の親指が咽暇仏にぴたりと当てられる。両手指で首を持ち上げるようにした。

細くて頼りない感じの首である。

うっ、うっ……」

放つ寸前と見た玉江が思い切り指に力を込めた。一時的に失神させてやろうと思つた。

う」圭吾は手足をばたつかせた。顔が真赤になった。

同時に下半身の一か所が怒張し、脈動感が伝われた。その瞬間を玉江は眼でたしかめた。

結合されたその部分だけを見ていた。

おのれの肉の穴をも思い切り締めた。が、余りの苦しさに、圭吾の下半身が大ききはねた。

上につけていた玉江は傍らに投げ出されていた。

もちろん結合部は外されていた。

なんや、あほみたい」

ちよつと恨めし気に玉江は言い、怖い顔をした。

殺意を内に秘めている女のように見えた。古毛布の、褥むとねの上で、二人は気まずい思いの顔を合わせた。

なんや、ぼく……」

苦しめうでも我慢しいて言つたやろ。あんたこらえ性がない

のやな」

はじめて玉江は怒ってみせた。

「ちもちもやっただのや、最高になつたのにな……」

未練がましいしゃべり口だった。

「ほならもう一回、首締めてもええ」

「もええ、あんたにはまた早いわ。男と女のこと、またよはわかってないもんな」

「ぼくはこれでも……」

しよげ返った圭吾の顔は急に醜く見えた。眼球を一樣に見張った眼は、飼犬の狛ちんのようにも見えた。

一匹の小犬が飼主の権幕に怯えていた。

「ええのんや、今のはうちの勝手や、そないに申し訳なきそうな顔せんでもええ」

ひよつりと立ち上った圭吾はめまいでもするのか、その場になすくまうてしまった。緊張感に耐えられずに眼ばかりを大きく見張った。ふっふっ「と息声をもらした。

久し影を潜めていたのに、玉江の叱責の声にまた病気の兆候を見せた。

やつと男を介抱してやる気になった。

「めんな、よあほど苦しかったんやな。ええ、ちほあんたが好きになつてるからいじめとかなんやで、わかつてるか」

かすかに圭吾は笑った。よく見たら首の回りに手の跡が残っていた。

索溝にそって赤い痣あざのような線ができていた。

3

快樂けらくのあそびのあとは暗い巢穴にもどる。口では許すよったことを言ったものの、まだ内心では、玉江は不甲斐ない男に腹を立てていた。

それで暗い坑道に入った時、いつもは先導して安全な一歩を歩ませてやるのに、少し邪慳にし早足で歩いた。

それなりの結合感覚はあつたが、勝とは微妙な点でちがつていた。勝は女の歎ばせ方をよく知っていた。

同じことを圭吾に求めてもむりなのに、玉江はやり愛した男の影を追っていたのだった。

こんな放将ほらつきを罰するためか、この日の帰途、二人の運命を狂わす怖ろしい陥穿かんせいが行く手に待ち受けていた。

坑道の中は今も危険な場所ばかりであった。井型の杭を打たれた豎坑はどこにぽっかり口を開けているかわからなかった。足場を踏み外すと、奈落の底、釣瓶つるべ落しに遇う。坑道の中にも障害物があつた。

樋引（とゆひき）に使う竹製の繰上げ樋の残骸に、体を突き刺されそうになることも、再々であった。

ニガイ箱といわれる土まんじゅう型の、水吸上げ機の土塊に足をとられて転ぶこともあつた。

縫地ぬいじといわれた天井の土砂が急に降り落ち進路を塞ぐこともある。

豎穴の場所には玉江は雁木（がんぎ）を渡していた。梯子だったが一本の樹を縄でつないだもので、足場になるよう斧で何カ所か、切れ目が入れられていた。

爪先が掛かる程度の切れ込みである。急造の梯子だったが、生木を伐って作つてあるので折れるとはなかつた。早足で坑道を歩いていた時、一ノ瀬圭吾は、首を締められたために、少し頭がふらふらしていたのか、おっふっふっ「と、息声を発し続けていた。

また神経の糸が切れたのか、一歩ごとに、顔を左右に震わせているよふだつた。さきから玉江の背後である苦しそうな息声が出していた。二人は雁木の梯子に両手でつかまりながら、前へ前と進んでいた。

危ない足取りであった。

やっこの思いで、一本の雁木に掴まつた。足を蹴り上げ、一方の手で雁木を掴む危うさの一步であつた。

が、その支えの雁木は時折り手が届かぬことがあつた。

突如、背後の暗闇で、圭吾の叫ぶ声を聞いた。

玉江があつと思つた時にも遅かつた。

体が前につんのめり岩に頭がぶつかつた。おのれ自身

の態勢を保つのがやっとだった。同時に足元が危うな
っていた。片手に掴んでいたのは、冷えた空気だった。
横倒しに肩から三メートルほど下に圭吾は落ちた。

したたかに後頭部を打ち、同時に、背を打ちつけてい
た。うむ」と唸ったまま、息が継げなくなつた。

玉江の呼ぶ声を聞いたが、それは遠くからの声なのか
、耳元で発せられているとぼなのかわからなかった。

そのまま圭吾は気絶していた。

玉江が駆け付けた時はもう一言も発しなかった。

圭吾あんた、どないしたん！しつかりい！」

肩を揺すつたが返事がない。死んだのかと思ひ圭吾の
胸に耳を当てる。どきどきと乱れた心臓音がしていた
。やっと安心するが、圭吾の後頭部にはべつたりと血糊が
付いていた。

圭吾が眼が醒めたのはしばらくしてからのことだった。

動かそうとしたら悲鳴をあげた。ぎっくり腰のような症状
らしく、激痛にうんうんと呻き声をもらす。

あー、ばちが当たったのや。ばちが当たったのや……」

うわ言のよほに、圭吾は苦しい息の下から同じとぼを
繰り返した。

あほなと言わんとき。ええか、ちが、ついているよあてに
。氣いをたしかにもたなあかんでえ」

だが、圭吾はもう弱々しい男になっていた。暗闇の中で
泣きじゃくるだけの男を見て、玉江もなぜか悲しくなり
一緒に泣いた。

彼らが住む岩室に行くにはもう一か所の堅穴を登ら
なくてはならない。それで、容態が回復するまで風が吹
き通す坑道で暮らすことになった。

自分で立ち上れるよになるのに四日もかかった。

高熱が出たが岩清水で冷やし氷室の氷片を頭に
当て熱を下げた。しきりに寒がる圭吾を、一つ毛布に
包み、抱いて寝た。

遠出はできないので玉江は近くの山で芽吹いた木の芽をむしり、川原に降りて雪の間から露をとを掘り出した。あの一件以来、食堂のあたりには近寄れなくなっていた。

ケヤキの樹の根元を掘りジムシを掘り出す。小さい頃に、義父に教えられた。甲虫の幼虫が腐葉土の中に身を隠していた。

サナギになる前の芋虫状の白い幼虫であった。

剣（く）り型を作る時に出る木屑おがくずの中に幼虫を埋めておく。夏を迎える頃、ジムシは一丁前の甲胃かつちゅうをつけた枯れ葉を分けるところろ太ったジムシが十数匹もとれた。口の中で含むと甘い香りがし結構美味であった。飢えをしのごためには姿かたちの醜など問題ではなかった。

玉江は寝たきりの圭吾に献身的につくした。

食る物から下の世話まで泪ぐましいほどのやさしさを示した。だが、二人の間には少しずつ亀裂が生じ始めていた。陽気さと、生きる力をとりもどしていた圭吾が元の自分の殻に閉じ込めてしまった。

脊髄の大事な個所を痛めたらしく、圭吾は半身不随の体になっていた。下半身に麻痛感覚があり、両腕を使って這いずり回らないと体を移動することがいできなくなっていた。眼球振とう症の症状もひどくなり、顔を動かすたびに震えが生じた。

大丈夫や、うちが治し上げる。一時的にな、こないな症状になっただけや。ええか、気い行かせたら前みたいになる。あんたは若いんやからちゃんと元通りになるよつてにな

玉江は口癖のよはに言い、圭吾の股間のものを口に含んだ。前にも増したやさしさの気持を込めて愛撫する。だが、麻痺した圭吾の下半身のそれは力を示さなかった。股間におかれたものは、死んだ虫のような形状を呈し縮こまったままだった。

来る日も来る日も、玉江は施療者になり、狂ったよう

に圭吾のものを口に含んだ。

ちよええのや。幸せなんてどこにもあらん。そやろ、これまでのこゝが、夢みたいたこやつたのや。一緒に入営したみんなは、お国のために命を賭けて戦うのに、ぼくだけがこゝで新婚生活をしたらたのや。話がうますぎるわ。ぼくはえらい罰当りや。意気地なしのな、臆病もんで、その上、足手まといの人間になつてしもつた……」

なに言そんねん。あんた、うちを抱きとらないのんか。うちの体はな、あんたなしでは生きられんよになつてる。あんたのな、こゝがうちは欲しいのや。どないしても一人前の男にしたる、あんた、また二十二歳やないの」

ちよ言わんといてくれ。この穴の中で死ぬのがぼくの運命やつたのや。ぼくは死ぬ気でこゝへ来たんやからな。なまゝの覚悟はでけてる。お願いやから首締めてくれへんか。あの時、苦しきを通り越したらな、ええ気持になれるんやないかと思つたのや。今度はな、ほんまに我慢できそんない気がするのや」

あんたが死んだら、うちはどないするん？この暗い穴の中で一生一人で暮らすんか。考えてもみ、うちはあんたがおるから生きて行けるんやで。男はんがおらんとな、うちの体はともならん、体が、かーと燃えてきてな、抱かれとらつて、もろ苛々してしまふのや」

ほなら、このままぼくが役立たずになつてしもつたら、あんたはこゝを出て行くんか。脊髓やられてしもつたら、男のつとめはでけへん。これで二度目のこゝやからな。ぼくはあんたに捨てられるだけや」

大丈夫や、元気になそ。うちはそないな薄情な女やないで」

玉江には圭吾がとても愛しく見えた。

童貞の若者に一から性のすばらしさを教えた。

これからがもっと激しいものになる―その望みが断たれよとしていたのだ。

玉江は一日数時間、圭吾の足腰を揉みほぐした。だが、男の機能は元のようにはもとどらなかつた。

這つて行くことはできたがすでに歩行困難になつていた。暗い廃坑内に閉じ込められた圭吾は、時折り悪夢にうなされ、汗をびっしょりかいた。

「う言なのか、菅原二等兵の名を呼んだ。

便所の隙間から目撃した首吊りのシーンが夢の中で再現された。彼はずっと自分の心を責め続けた。

「ぼくが殺したようなものや。ぼくは地獄に落とされるのや。やつとな、あの菅原二等兵の気持がぼくにもわかるよになつた……」

その、ことばかりが、彼の頭の中には、渦巻いているかのよかつた。

いつか、玉江は圭吾との間に齟齬がこの気持を持つよになつた。自分の体がどうにもならぬ苛立たしさに、彼は、わがままな男になつた。無口になり、玉江のやさしいことばも受け付けななつた。

苦勞して集めてきた食物にも注文をつけ、挙句の果てに、食物を拒否した。

「もう飢えて死にたいのや。かまわんといてくれ」

三日も断食してみせた。

この時は危険覚悟で人里まで遠出し、人家に忍び入つて白米のめしを手に入れた。

やつと圭吾は口にしたものの、体力は明らかに衰えていた。男と女の情が通じない、そんなやる瀬ない日々が、このところ、続いていた。

ある日のことであつた。

玉江は、体の内から兆して来る欲望を押さえきれずにいた。生身の人間なのに、圭吾は生ける屍なのだった。ひとり、岩室のほぼ直下になるあの氷の室に通う目が多くなつた。葉室勝の冷えた肉体に玉江は情を通わせたのだった。小さな陰毛の毛束が、勝の生きている時の感触をそのままに伝えてくれた。

勝はよく指で唇をやさしくなぞる愛技を施した。

まるで毛先でくすぐるように微細な感じを伝えた。玉江はくすぐったさの快感を自分の唇に授けてやる。今は、この愛の分身は勝のやさしい手そのものだった。

玉江の指は内腿にと伸び、そこにそそーとしたくすぐったさをつらた。腋窩をきかの溝のくぼみにも這い、そして尻の双丘のすばまた谷にもほうき草で撫でるような快感が伝えられる。

思いつ切り、玉江は喘ぎの声をあげる。

岩室に籠もる自分の声の切なさには、なお身を悶えた。その声に酔った。

勝さん……あんた……」もう死んだ男と一体になっていた。黒い毛飾りのひそみに指が差し入れられる。

かすかではあつたが出入の行為の中に、勝のかつてのやさしさが呼びもよばれて来るのを感じた。

寒さの中の行為なので体が冷えて来る前にせわしなく指を動かせた。それだけ気を行かせた。

ああ、気が行く……勝さん、うち、もう……ああ、気が行く……」玉江は一人で喘ぎ、乱れた。

その時、圭吾は、堅穴の入口まで這つて来た。

も何度も地底からの喘ぎの声を聞いた。

悪霊たちの呻きの声とも聞きとれた。

岩壁にはね返り、人の住まぬ坑道のさらに深い地底から泣き声とも、怨みの声ともつかぬ叫びが充ち充ちていた。きまつて、玉江が地底に降りて行く、身をゆするようなその鬼哭きこの叫びがわき起った。

この日、堅穴のすぐ上で耳を澄ますとかすかではあつたが、勝さん……」と呼ぶ玉江の声を聞きとることができた。あの、性の激しさに身をよじらせる時の喘ぎ声であることも知った。圭吾の胸のうちに、強い嫉妬心がわいた。どうしてもその声のするほうへ、一步をすすめたかつたが、それ以上は体がいうことをきかない。

這つてきただけで腰椎に痛みが生じていた。

暗い地底の穴から冷たい風が吹き上げてきた。

風だけが彼の頬を打った。

やがて、風音を騒がせた地獄の声音はふいと掻き消された。何事もなかったかのように堅穴の雁木を伝って、玉江がもぎつてきた。

彼はいきなりそんな玉江に詰問した。

あほやな、うちは時々、昔の男の夢を見るのや。そいで夢の中でその男の人の名を呼ぶのやわ。そやろ、考えてもみ、この地底の穴ん中にもう一人、生きてる人がおるなんて考えられる？」

そやけど、あの声は」

ひとりぢな。楽しんでできたのや。うちが切のうなることかてあるやろ」

ぼくがこんなんやから……」

そや、うちが可哀想や思うたらはよふよふなうてえ。あんなの、女々しい気持がいちばんようないのや」

あかん、あかんのや……やつぱりぼくは罰当りのや」
あんたが罰当りやつたらうちなんかもどつくに地獄に墮ちてるぞ」

玉江は圭吾を抱きかかえるようにして岩室まで連れて行く。寝藁の床は、背骨を傷めている圭吾のために、玉江がわざわざ作ってやったものだった。

この夜、また、圭吾は高い熱を出した。体にさわると火のように熱くなっている。これで何度目かの発熱である。

それでも、氷の室から氷片を切り出し、冷やしてやると朝方にはどうやら熱は下った。

氷片を持ち出す時、玉江は氷の体になった勝に頼み込み、あの人を死なせたらあかんぞ」と独りごちた。

その願いが叶えられたのか、圭吾は朝にはうまそうに岩清水をぐりぐりとのんだ。

あいな……ぼく、夢を見てたわ……この体がもうちゃんと治つてな、ほらあ温泉のそばで二人は抱き合ってたのや」

それはもうすぐよきなさいとの報せやぞ、きつと」

おかしな話なんやけどな、ぼくがな、赤ん坊を腕に抱いて

たのや」

赤ん坊、ほなららちちの子お？」

ああ、そや。よよ太つてな、ぼくらの顔見て笑うた」

ほんまにうちのお腹の中には二人の子供がおるのやも知れんな」

玉江は圭吾を喜ばせよと思つてありもしないことを口にした。

そいで、その子は男の子やつた？女の子やつた？」

どっちもわからん」

あんたはどっちがええのんや」

そやな、ぼくの生れ変りやとたら男の子やけどな、そんなん可哀想やわ。弱虫言われてしまうもん、やつぱり女の子がええ」

女の子かあ」

ちよつと玉江が考えたふうのことを言う。

そやろ。女の子やつたら戦争にも行かんですむもんな」闇の中だったから玉江には圭吾の表情はしかとは見えなかつたが、ぶつりとよよばが途絶えたので、圭吾の心の裡うちをふと垣間かき見たような気がした。

「二人は結婚したのやからな。赤ちゃんがいちもつとも不思議やないで」

「ああ、ぼくな、姉さんよへ、あてびに行つた時にな、ああ姉さんは幸せやなあと思つたことがあるのや。この生野の鉱業所の社宅やけども、また生まれたばかりの赤ちゃんがついて、五年前のことや、女の子で薄桃色の産衣を着てた。そいで、部屋には火鉢があつてな、鉄瓶のお湯がちんちん沸いてるのや。よあしや、ぼくかて、姉さんみたいに幸せにならぞつて、その時、心に誓つたのや」

ええ話やな、うちかていつまでもんなどにいるわけやないで。あんたが元気になつたらな、うんと遠いよへ行へそしたらな、あんたの願い通り、うち、女の子を生んだげるよあてにな」

玉江は圭吾が不憫になつていた。

小さい時に父母と死別した境遇は玉江とよく似ていた。

なぜか涙が溢れそうになった。一晩かかつての看病疲れもあったが、いかにも運のない男という気がした。

玉江は気付いてはいなかったが、同情の気持の中に、いつしか、愛の心が芽生えていた。

考えてみれば、玉江も暖かな父母の愛に飢えていた。荒んだ気持のまま生きてきたのもどこかに、そんな家庭的な暖かさに嫉妬する気持があつたからにちがひなかつた。ふと洩したのは、多分に、自分への不憫さの気持があつたからである。弱い者同士、玉江は強がつて生きてきた自分の弱い部分をつかれたような思ひになつた。

その思ふと無性に圭吾が愛しくなつた。

はじめて玉江は圭吾に涙を見せた。

圭吾の髪を撫で、愛しそうに痩せ細つた頬のあたりに指を這わせた。ふくらふ……と圭吾も肩をふるわせる。

ええか、あんたにはうちがついてるぞ。どんなことがあつても守つてあげるよつてにな。うちはあんたが好きになつてるのや
「玉江は涙に濡れた頬を圭吾の顔に押し付けた。
やつと心と心が一つになつたよつた気がした。

いや、それだけではない。

いつか、葉室勝の時に持つたよつた切迫した気持になつた。
。命の薄さを一ノ瀬圭吾にも感じとつていたのである。

この若者を失うまいと思つた。

5

ある日、また圭吾が高熱を出した。

二日続きの高熱でいつも様子がちがつていた。
火を焚くことを慎んできた玉江だったが、今度ばかりは
そもいかなかつた。圭吾のために煎じ薬を作つた。

義父の教えてくれたみみずの煎じ薬だつた。

枯葉を分け、黒い土を掘ると何匹ものみみずが見付かつた。小刀で腹を割く。

はらわたには毒があると聞かされた。

一匹二匹、小川の水で洗つてから拾つてきた土鍋で煎

じた。これは熱さましの薬になる。

夜半、百姓家に出かけて行き、鶏小舎に忍び入って、鶏の首をひねった。いたちか狐の仕業と思い込ませるために網の下部をそれらしく破り、鶏の羽毛をあたり一面にまき散らし擬装工作をした。

鶏の素っ首を切り落し、生血を圭吾にのませた。

骨の殻でスープを作る。肉は保存食にするために落葉でいぶし燻製にした。

ぼくは、ももあかん、長はないでえ。やっぱり戦争について、死んぼうがよかったのや……」

圭吾はまた弱気な男になっていた。

もう死にたいと口癖のように言い、駄々をこねた。

火を焚いた翌日の午後、急にまわりの山が騒がしくなつた。川原に降り、沢蟹を漁つてから密堀坑の横穴に入ろうとした時、眼下に人の群れを見たのであつた。

十数人の男たちが白口坑の方角に向けて山を登つて来る。みんな手に手に武器をかざしていた。

えらいこや、山狩りや」

玉江は火を焚いたことを後悔した。

煙が立ったのを誰れかが目撃したのかも知れない。

それに、食堂での泥棒猫事件、鶏泥棒と点と線をつなげば、山狩りも理由のないことではなかつた。

岩室に身を潜めていれば絶対に発見されない自信はあつたが、食糧の調達や、街に出かけることには、かなりの制限を受けることになる。

あんた、声を立てたらあかんで」

二人は穴ぐらの中でじつと息を潜めていた。

熱のために体中の関節が痛み、その上、だるまが圭吾を襲つていた。饅すえた匂いの敷藁の中で先程から圭吾はうんうんと唸っていた。

相変らず菅原二等兵の亡霊に悩まされるらしく、うごめたとと思つたら急に「きつ……」と奇妙な声をあげ、眼を醒ました。圭吾は恐怖心に駆られていた。

ちとどぼくは捕まるのや。ぼくは敵前逃亡兵とおんなしや。もつどもならん。どせ捕まるんやったら頼むから殺してくれ。そや、いつかみたいに首締めて欲しいのや。自分では死にきれん情けない男や。ええからこの細首、思い切り締めてくれ…」

あほなと、その時はな、うちも一緒に首締めて欲しいわ。死ぬんやったら一緒に。今のあんたはうちの首締める力ないよつてにな。あんただけ死なすわけにはいかんのや」

駄々をこねる圭吾のために、玉江は上半身裸になり圭吾の唇に豊かな乳房を押し付けた。

もはや、圭吾には双乳を手でつかみとる気はなかった。だが、首の甘酸っぱい匂いが圭吾の鼻翼をかすめた。

赤ん坊に含ませる母乳の匂いがした。

突き出した唇が乳首の一つをこらしていた。

添乳をしている母のよつた、玉江は乳首をいつまでも含ませていた。が、圭吾は、いつか、顔をそむけてしまふ。

ああ、もう一度、ええから玉江はんを抱きたいのや」

はじめて圭吾は“玉江はん”と彼女の名を呼んだ。

生真面目で、照れ屋の彼はなかなか玉江の名を呼べなかつたのだ。

「そいで、ええ気持のままぼくは死にたいのや。そやろ、玉江はんを抱かれながら、首締められるんやったらそない幸せなことはないで。こんな体になつたんが、らめしい…」

うちの体が欲しいと思つたら治るのや。なあ、お願いやからうちを夢中にさせて。うちのはえらい具合いがええのや。どんな男はんでも喜ぶのや。な、思い出すのや。うちかて欲しいん。これは気の病いや、あんたの一念で治すのや」

額の濡れ手拭いを代えてやる。

あがとぼくがんばるで…」

この時、遠いさんざめきの声だったが、玉江はなおも近付いてくる人の気配を耳敏く聞き分けた。

だいたいよおや、この岩穴をみんな探ろと思つたら二二三

十年はかかるぞ。いまは戦争してるのにそんなことしてたら
どもならんもん」

そう言い残し、玉江は様子を窺うために、岩室を出、白
口若林坑あたりの横穴の一つから男たちの動向を観察
した。山に分け入った彼らはあたりの木を伐採し始めた。
いくら逃げたかて、食い物がなかったら生きて行けんでえ
あほな奴らや」

鉱山夫とかいうたって、わしらよりぎょうさん、きつい分、儲
けとるのにな。よう逃げるよそ。今度は三人組か。了見の
悪い連中や」

「この穴で暮らせんことはないけど三日と持たんで」
めし付き風呂付や。ほんま餓死するより、ましやと思っけ
どな」男たちは口々に勝手なことを言いながら山の木を伐
り、若林坑の入口を木で塞ぎ、そこにバリケードを作った。
鉄条網も張り巡らせる。

おおよその状況は読めた。不逞労務者の何人かが
鉱業所から逃げ出したのにちがいがなかった。

逃げ延びたのか、それともすでに捕まり、今後の用心の
ために穴を塞ぎに来たのかはわからなかった。

男たちが去ったあと、山はいつもの平静さをとりもどして
いた。

6

朝来郡あさき(和田山の藤和地区に、玉江は足を
踏み入れていた。

一ノ瀬圭吾の熱病はなお病状が悪化した。いわゆる
満州熱と呼ばれるもので、人間に寄生する蚤やしらみ
などが媒介する。鉱業所寄宿舎から持ってきた衣類の
一つに寄生虫が潜んでいたのであった。

玉江は、圭吾の口から和田山に住む姉のよし子の
居所を聞き出した。

熱病を治すための薬と食糧、それにいくらかの金を用
立てしてもらおうと考えた。

このまま放置すれば、圭吾は衰弱が激しくなり死んでしまふかも知れなかった。

藤和地区は周囲を山々に囲まれた辺境の地であった。鉄鉦山、東床尾山、西床尾山など、七、八百メートル級の山々が控えており、人の住む村落はその山裾野に張り付くようにして点在しているだけだった。

玉江の足には山越えは苦にならなかった。

かつて、日高の奥深い山々を踏破したことがある。

難行苦行の道も玉江なら平地を歩く速度でこなせた。ちよびど、生野から和田山の神子畑選鉱所に行く貨物列車が発車するところだった。

無蓋車の一つにもぐり込み、すっぱりと頭からキャンバスをかぶる。汽笛の響きがとでも勇壮なものに聞えた。レールを噛む軌轍音に心から感謝したい気持だった。

圭吾の病状は一刻を争う状態だった。

いくらか長いトンネルを越えた。

明方近く、和田山に着く。

東の空の山端が薄藍色に染まり始めていて、朝が間近であることを知らせていた。

このあたりは豪雪地帯で知られる。銀白色の山の頂きは、やがて、その背景に明るさを忍ばせてきた。

線路伝いに養父やぶ方面に向けて歩く。除雪された道だったが、またまわりの樹々は深い雪を、かぶったままだった。

圭吾の姉の嫁ぎ先である藤和は冬期になると孤立してしまふほどの奥地であった。

特に今年は初頭か雪量が多く、また遅い春のためにかのりの雪が各地には残っていた。

九十九つづら折りに曲がりくねった峠道をたどり、玉江は一人道を急いだ。

本当なら山中に入り、人目につかぬよう行動するのだが、この積雪量ではいくら健脚の玉江でも足をとられて前にすすむことは不可能だった。

圭吾から教えられたたった一つの目標物は藤和の大

將軍杉だけだった。

樹齡百年といわれる巨木で、峠道の際にありそこから程遠くない場所に目的の地はあった。

だが、初めての場所で玉江は道に迷った。

方角がわからなくなっていた。

石地藏をまつた小さな祠(ほこら)があった。お地藏様も目標点の一つだった。一安心して、玉江は、そこで足を止めた。

雪の深さは一メートル余はあった。このところ冬の往来は絶えているのか行く手の雪道は荒らされていない。

峠道を半ばまで入ると人家もなくなり行く手はただ白い雪野原になった。峠道といっても深山幽谷の道ではない。畑地があったり雑木林があったりで、比較のおだやかな地形であった。

ただ曲がりねつた道はかなりの急勾配になっている。

雪道は中央部がずっと雪かき道になっていたが、凍てついたところもあり、用心しないと足を滑らせそよになる。喘ぎ喘ぎ峠道を登ったら右手に天を突く高さの大将軍杉があった、

雪を頭からかぶった大きな杉の樹の下は暗くなっている。高さ四十メートル、幹の太さは、大の大人が三人は手をつながないと抱え切れないと思われた。

目標地点をひとまず見つけので、玉江は疲れも忘れて。縮(ちぢか)んだ手足の冷たさも忘れた。

この大將軍杉から上に登り、五十メートルも歩くと小さな藁葺きの百姓家があった。

重い雪に藁葺き屋根はおおわれている。崩折れそうにたった土壁の納屋があり、母屋にもたれかかっていた。薪が軒先に積んであった。

少し外れた場所の、庇(ひさし)の屋根にも雪がふんわりとのっている。一本の柿の樹があり、裸の枝が寒そうに風に吹かれていた。

圭吾からはこの柿の樹のことは言われた。

彼自身はこの地を訪れていなかったが、書信で姉から

は訪ねて来る時の道順、目標物などが知らされていたのだ。表に表札はなかった。玉江は裏に回った。

鶏小屋があり、搔きならされた黒土の上で数羽の鶏が餌を食んでいた。コツコツと人の足音を聞きつけて用心深い警戒音を発した。

主(あるじ)のいななつた鶏小舎をのぞいたら、地卵が二つ、また巣箱の中にはとり残されていた。

とらぜん、子供の泣声があった。

母親のちよつと高い声が続く。裏の勝手口は半分ほど開いている。農具置場の小屋があり、その中に身を潜ませると、少し中の様を窺うことができた。

暗い土間があり、上り櫃かまちの板の間が見えた。

むずかった女の子が勝手口の際で泣いていた。

お河童頭で、齢は五歳ぐらい、よく見るとどこか圭吾と似たところがあった。圭吾が語ってくれた赤ん坊にちがいないと思つた。

いつか圭吾の腕にも抱かれたことがあつたのかも知れない。赤いじんべえを着ていた。ふつくりした小さな手がしきりに眼のあたりをすつている。

奥から祖母らしい女の声が届いた。

けいこはようちへ来い！女の子の名は「けいこ」といふのだつた。何となく玉江は圭吾のことを思つた。

勝手口を出た左手に釣瓶式の井戸があつた。

女なら井戸水を汲むために井戸端に立つ。

その機会を玉江は待つと思つた。

誰れに知られてもまずい。

こゝは姉のよし子の嫁ぎ先であつた。

も午前八時にはなつてゐるだろうか。雪は深いのに陽光だけは春のものになつてゐる。

空腹のために玉江の腹がなつた。

貨物列車を降りてからはかなりの強行軍だつた。

四、五時間は歩いたことになる。やつとよし子らしい女が、洗濯物を抱えて井戸端までやって来た。

玉江が身を寄せた。

あの、どが乾いて、一杯のましていただけませんやろか」不意のことで女は眼を見張った。

押しかぶせるようにして、玉江がこぼを続けた。

あの、圭吾さんは無事ですからそれで、うち圭吾さんの代りだ、ゴート」

髪の毛を後ろで引つ詰めにした丸顔の女だった。

髪の毛がほつれていて生活の疲れが出ている。驚きの表情がほっとした安堵の表情に変わる。

だが、また口元は引き吊っていた。

家のものがおりますから、ようやう」

先ほど、玉江が潜んでいた農機具小屋に誘われた。

よし子さんでしょう。お姉さんのことは、圭吾はんからよう話に聞いてます」

小屋に入るといきなり両手を握られた。軋あかぎれのしたぢらした手だった。

生野の廃坑跡に。それで熱の出る病氣してて体が弱つてる。どうやっても救ってあげたいんや。それで薬と食物、あの、それからちと遠くへ逃げなあかんと思つて、お金も一銭もないものやから

「へ、来たらあかん。憲兵の人が来て、みんなひどい目に、遇てるのや。こゝは見張られてるかも知れんし。うちの人がて圭ちゃんのことよりは思つてへん。出稼ぎに出ていまはおらんけど、爺ちゃん、婆ちゃんに知られたらえらいことやわ」

暗い小屋での立話だった。

よし子は三十前の齡のずだったが、玉江よりずっと老けているように見えた。

その時、また母屋のほうで子供の泣く声が出た。

待つて、でけるだけのことはするわ…」

よし子が、そそくさとその場を出て行く。

十分がたち、二十分がたった。

よし子はなかなか現われない。

小屋の奥に格子窓があった。棧が入っただけの粗末な造りである。その窓の向うは、急な斜面の杉林が見えた

梢の雪は払われていて、青黒い針葉が天を刺していた。子供の泣く声はもう止んでいた。

杉の梢をかすめるようにして一羽の鳥が飛んだ。わずかに残っていた雪が枝のしわみでぱーつと白い粉をあたりにまき散らす。がーつと鳥は嫌な声音を發した。

ぐーとまた空きつ腹が鳴った。なんだかとても人間らしい音だと思った。一人の男のためにこゝまでやって来た。

一ノ瀬圭吾のことがほんとうに好きになっていたのだ。愛なのかどうか玉江にはわかっていなうたが、男につくす歡びがわいてきた。

あの、若い肉体にいま一度、男のいのちを甦らせてやりたい。何から何まで一から性の処法を教えた男なのだ。もっともと凄いいものにしたい。

身がとろけ、熱く爛ただれるまで玉江は性のすばらしさを堪能したかった。

いまは圭吾のことが愛しい。

圭吾の背負った不運な日々に傷ついた者同士の心のつながりを見つけ出した。わたしがいなければあの人は…その思いがなによりも玉江の心の支えになっていた。…やつと裏口が開き、よし子が姿を現わした。

小走りにやって来、小屋の木戸をそつと開けた。

待たせてしもつたな。なんせ貧乏世帯やから、これしか用意でけへん。中のもんはあとで開けてえ、時間があらゝんものね。それからお金は十二円しか都合できんかった。あ、それからね、握りめしが入ってるから道々食べて。氣い付けてね」

布製の奉公袋を手渡された。

あんた、お名前はなんて言ふの。くわしいことは、きかんけど、弟をよろしくな」

はむろかつこです」

玉江は嘘の名を告げた。自分が殺人犯の女で脱走中の身であることが知れたら、よし子が悲しむと思つたのだ。圭吾には、ふさわしくない女である。

「…たった一人の弟でな、なんや、幸の薄い子や。わたし

もよう面倒みてやらんとそれだけが気がかりでな。どうか弟のことよろしくお願ひします……」

あとは泪声になった。古びた木綿地を仕立て直したモノペンには、つぎはぎが当っている。

生きてたら、きつとええともあるのや。そないに言うて下さい……」

よし子は声を詰まらせた。

それからもちのことは圭吾さんとは関係のない女にして下さ。どんなことがあるかも知れんもね。もしうちが捕まるよなことがあつても圭吾さんの居場所は絶対にしやべりません、腹がへつて物乞いに来た見知らぬ女や言うて下さ。」「

ほんまにありがたいことや。あの子のことくれぐれよろしく……」

玉江はよし子のことばを背に小屋を出た。

ふと振り向いたらよし子は両手を合わせ、何度も何度も頭を垂れていた。一期一会の出会いであった。

杉林の道に下り、迂回して元来た道に降り立つ。

再び雪掻き道に出ている。

右に左に二つほど道を曲がると、あの大將軍杉があった。なんだか急に疲れが出てきた。

握りめしんことが頭にあつた。

きのこの夜から何も食べていない。

木株は優に四メートルの太さがある。根瘤（こんりゅう）が地表に張り出していて、ちよと腰掛けの代りをしてくれた。玉江は奉公袋の中味をあらためる。

富山の生薬に、げんのしょうく、じゅうやく、よもぎ草の乾燥したもの、大根の切干に、干瓢、梅干し、それから引き抜いたばかりなのか根に土のついたゆきのしたが入っていた。心づくしの品々であった。

それに米一升ばかりに大豆が少し、いちばん嬉しかったのは生卵が二個入っていたとどだった。

竹皮に包まれた握りめしは二個入っていた。

沢庵が添えてある。夢中で一個を平らげた。

沢庵をかじる。久し振りの味だった。ぱりぱりと噛み砕く。玉江にはとても新鮮な音に思えた。

生きている気がした。

二つ目の握り飯には手を出さなかった。

圭吾のことが頭をかすめた。自分だけ豪華な食事をしてはすまないと思った。

一個の握りめしが腹に入ったら急に尿意を催した。

それに余裕が出たのか、少しばかりいたずらこころが生じた。誰れも見えていない雪の世界、ここには一人だけの空間があつた。手つかずの純白の雪が、眼の前にはこんなもり盛られている。

玉江はモンペを降ろし、尻を丸出しにした。

しゃがみ込み、一気に放尿した。

あたたかな小水に打たれてその部分だけ雪が溶けた。勢いよく飛び出したので雪の表面に穴が開いた。

湯気が立つ。「ああ、わたしやっぱり生きている。そんな嬉しきの情がわいた。

が、これまでの一部始終を木の陰に隠れて見ていた男たちがいた。尻を剥き出しにした不用意な姿勢のさなか、背後から玉江は声を掛けられた。

おい、なにしてる。」

そこに立っていたのは顔のいかつい男であつた。

彼らは、平服を着、烏打帽をかぶっていた。

あわてて玉江はモンペをあげ、立ち上る。

なにしに来た？よあぼどのこゝろがないとの時期、こゝろ来るものはおらんぞ。」

小便したあとの雪は溶けてぐちゃぐちゃになっていた。

無邪気なあそびは、無惨なかたちだけをそこに残した。すでによし子の家は地区の憲兵隊の監視下におかれていたのである。

脱走兵の系累であることで、よし子の家は村八分の状態におかれていた。よし子の夫は農事の手伝いをして生計を立てていたのだが誰れも声を掛けてくれなくなり、止むを得ず、他村に出稼ぎに出ていた。

この家に近付くこと自体が危険であったのだ。連絡網は密にできていて、怪しい者が近付けば村の駐在に通報がもたらされるようになっていたのだ。

戦時下の駐在巡查は、当時村では村長・学校長と並び村の三長官といわれたほどの権限を持っていた。昼間の警邏は廃止され、もっぱら各種視察・内偵・捜査・防空・兵事などの時局下急務の処理に当たっていた。この場合、密偵役を買ってでていたのは村の駐在巡查で、地区憲兵の手先機関としての役目を負っていたのだ。玉江は咄嗟に逃げよとして身構えた。

山中に迷い込んでも逃げ延びる自信はあった。が、鳥打帽の男の背後には猟銃を構えた二人の男がいた。いつときでも早く、圭吾の所にもどり、新鮮な卵や、握りめしの味を味わわせてやりたかった。

このやさしさが仇になった。近道をとるために人里への道を辿ったのがいけなかったのだ。雪は深くとも裏山に入っていれば発見されずにすんだかも知れない。

なぜ捕まったのかやっと玉江にはわかった。大將軍杉を見つける前に、地蔵小屋の前で一休みした。その時、ちらと人影を見かけた。

地蔵小屋の裏手の小さな物置小屋の中に老婆がいた。屋根のある場所なので、お地蔵様に詣った道ついでに、老婆はそこで一休みしていたのかも知れなかった。お地蔵様に捧げられた一輪の梅の花が雪をかぶっていなかったのが、急に生々しい感じで思い出された。

事実、この時、玉江の姿を目撃した老婆の口から、緊急手配の方策がとられたのであった。

長い時間歩かされた。村人たちの好奇の眼にさらされながら駐在所に連行された。

鳥打帽をかぶった男は巡查姿に変身した。

丸帽に詰襟ボタンのサージ服、サーベルを腰にした男はたちまち威丈高になった。

所持品から不審者として取調べを受けたが、玉江は

圭吾のことは一切しゃべらなかつた。

二日目の朝、駐在巡査はよし子をつこの場に連れて来ると脅かした。あくまでも面識者同士であるといふ前提に立っていた。白状せよと強要され、髪の毛を掴まれて何度も机に頭を打ちつけられた。

憲兵隊が間もなくやって来るとも告げられた。

圭吾と姉のよし子を守る方法は一つしかなかった。

わたしの本名は尾形玉江です」

はむろかつこと名乗っていた玉江は、自分の名を明かした。もはや、観念した。

あとでは情にすがつて物をいしただけです。握りめしと生卵をもつただけで、他のものはよその百姓家で盗んだものです」

それからよむみない口調で玉江は自分の犯した罪のことを述べた。殺人・死体遺棄・放火、脱走の罪である。

間もなく本署から照会の結果が知らされてきた。

尾形玉江が、手配中の最重要脱獄囚である事実が判明した。駐在所の巡査は凶らずも大手柄を挙げたことになる。この殊勲の逮捕劇には追つて恩賞の沙汰があるはずだった。たしかに、脱走兵と殺人・脱獄囚との関係はどこにもつながりがなかつた。

一脈のきな臭さを感じとることもできたが、駐在巡査はすっかり時の人になり、それ以上、一ノ瀬圭吾と玉江との関係までは、追及しなかつた。

両手錠、それに足首まで手錠が噛まされて、駐在所の留置場の、板の間に転がされた。

翌日、二名の刑務官が、北神拘置所から身柄引取りのために和田山まで出向いて来た。

駐在所を出る時は、物見高い村の連中が彼女を取り巻いた。玉江はこれでも自分の素姓はよし子に知れてしまふと思つて悲しかった。小さな子供が石を投げた。

まるで刑場に引き立てられて行く女死刑囚だった。大殺しの女や「そんな騒ぎ声も聞えてきた。

〈昭和二十年三月六日〉

また冬景色の暗さが残っている空は、心冷え冷えとするものだった。風も寒い。

「ぜつたいにまた逃げてやる」と玉江は心に誓った。

あの廃坑の暗闇「そが玉江にとつて現実の世界なのだ。玉江がいなくては圭吾は一人では生きて行けない。

どうしても圭吾には自分が必要なのだ。

いや、あの性の歓びをどうしても今一度、圭吾の肉体に甦らせてやりたかった。

二人だけの自由な性の世界、そこには全(またきき裸の男と女の歓びがあるはずであった。

奔放な性への強い想いに玉江は身を妬き始めていた。

山陰線の福知山を經由し、途中、神有電鉄の三田で乗り変える。終点の湊川駅まではずっと下り勾配路線であった。途中、いつか降りたところのある鈴蘭台駅を通過した。この盆地の街には、菅家吉蔵の持家であった旅館があった。この山間の小さな街も幻の絵になり遠くへと過ぎ去って行った。狭い山間の線路道の両側はやがて裸岩の切り立った光景に変わる。菊水山の駅を通過する。

三角錐のとがりを思わせる山々が重なって見えた。

いまは、逃げ延びた道を逆行しているのだった。

菊水山を越し、いくらかの山を巡るとその山裾野に北神拘留所がある。行き着く先は未決監だったが、菅家吉蔵を空襲下を利して殺害、焼き捨てようとしたことそして看守の林亥之助を逃走を目的に殺害したこと、この二件だけでも間違いなく死刑の断罪が下るはずだった。

尾形玉江は「戦時重罪犯」の一人であった。

電車は一路、南へ南へとひた走る。港のある街は、いま、戦いのさなやかにおかれていた。

山の尾根を巡る電車は時折り見晴らしのいい場所に出た。急に山の壁が切れ、視界が開けるのであった。

すすむ方角には、春またきの、霞(かすみ)のかかった海が、わずかに光って見えていた。

何となくのどかな光景にも見えたが、港に沿って広がる神戸の街はやがて敵機の目標下に据えられる。

過酷な運命が春ののどかさは裏腹に、この街には用意されていたのである。

戦いとは無縁の逃亡生活だったのに、市街地へと走る電車は、玉江をむりやりに、戦火のただ中へと連れもどそとどしていた。

(第六章 了)